

『深夜の雷雨』(06/10)』

一瞬の間に
稲妻が光り走り
音が轟き渡る
みるみる雨が落ち
その日の深夜は
雷雨まじりの
夜となった
安らかな眠りの世界が
変わった

神様が
天の怒りを
天の悲しみを
天の苦しみを
稲妻となって
雷音となって
豪雨となって
この地上に
落としているのです
街路灯に照された
道はたちまち

黒く流れの模様を
闇夜に反射し
音が空中で裂くれつし
稲妻が暗黒を浮かび見せ
瞬時に闇に戻している
寝息が目覚め苦しみに
変わった

天上の事は
神様の御事ですの
祈りを捧げましょう
すべてはもとに戻って
安らかな寝息の世界に
憩の永遠なる世界へ
戻りますよに
夢の国へ寝息をたてましょう

『眩しい陽』(06/03)』

六月の昼下がりが
眩しい太陽の光です
木漏れ日の陽は
けだるい眠りへ
夢の入口のようです

苦しきも辛さも
ありますけれど
まるで満ち足りた
幸福の世界のように
私は眠りにつくのです

ほのかゆい夢の中で
私は飛んでいるのです
大空の中を自由に
みんなみんな遊んで
みんなみんな遊んで

六月の青空の中を
木漏れ日の夢は
眩しく眩しく揺らいで
幸福の世界の様に
静かさの景色なのです

『曇の空』(06/06)』

灰色の上空
うなだれている
樹木の緑

どんよりの陽には
にぶい輝きが
とつても似合います

私の心のように
灰色の世界は
悲しいのでしょうか
何に疼いて
何に心を閉じて
六月の曇の空よ

私には希望もない
でも

貴方には酌熱の
真夏日が待っているのだ
ああ
溢れる強い光線の日々が

もう若さも失いました
人生の道は夢のようです
生きはうそのようでした
六月の曇の空よ
うなだれている葉の緑よ

私には希望もない

『そうですね (06/08)』

そうですね
苦しいのですね
さあ 泣きましょう
帰らぬ思い出に

悲しいですか
胸が痛みますか
さあ 泣きましょう
声を出して出して

愛しい人を
消すことはないのです
愛しあつた日々を
泣きましょう

楽しかった日々を
傷つけることはないのです
思い出として心に

涙しましょう

そうですね
愛した人との別れは
胸が張り裂けますね
次から次と涙が落ちますね

誰もがどうすることも
できない悲しみなのです
耐えましょう
泣いて堪えて生きましょう

人って悲しいですね
人って辛いですね
人って苦しいですね
人って淋しいですね

もう夜明けです
外は雨でしようか
胸が痛くて痛くて
一日の朝が来たのです

『泣き (06/08)』

とうとう一人
蒲団の中で
耐え切れず
声を出して
泣きだしました
助けてくださいって
自分の人生が
哀れでした

どうしようも
ないのです
身体がだんだん
硬直して
置きどころが
ないのです
身体がだんだん
冷えてき
震いだし
とうとう声を出し
泣きだしました
人生の辛さに

夢を見ました

仕事をしくじった
自分の夢を
目が覚めたら
身体が温かくなっていて
痛みがやわらいでいました
午前四時の事です
眠っているあいだ中
私の身体は
どんなにかつらかたろうに
感謝で涙が
こぼれ落ちました

温かくなった自分の
身体をかみしめ
痛みの弛んだ身体に
しばし安堵の息を抜く
一人いの部屋には
森の小鳥の囀りが
朝の光と一緒に
忍び込んでくるのです

『失恋 (06/10)』

苦しいのでしようね
胸が痛むのでしようね
走馬灯のように
楽しかった日々が
回っているのですね

失恋ってね
耐えられない
苦しみでしょう
失恋ってね
耐えられない
痛みでしょう
夜が来るたびに
そう、生きるのが
嫌になってくる

貴方ばかりでは
ないのですよ
この私だってね
なんどこの胸が
張り裂けたことか
そう昔はね

時が忘れるって
あれは嘘ですよ
今は懐かしい思い出

心が痛むでしょう
今日も思い出の
街を歩きましたか
時は帰らないから
胸は裂けそうでしょ

『六月の雨 (06/10)』

とうとう
降りだしました
銀色の雨滴が
傘の上で
光って
滑っています

雨って
何なのでしょう
天上の
泪なのでしょう

それとも
天上の
慈悲の育みなのか

この地上の
あらゆる物の
苦しさと
悲しみを
大地へ
雨滴とともに
沁み込ませて

この地上の
あらゆる物の
恨みと無念を
雨とともに
地中に
深く深く
沁み込ませて

夏の青空へ
蒸発させるのでしょ
色とりどりの

咲き乱れる花へと
昇華させるのでしょ
生きある物の心を

『花と葉 (06/13)』

紫陽花に
雨が落ちています
悲しみを
洗い流すように

紫陽花の
花の色はモザイクよ
紫色よ薄黄色よ
空色よ白橙色よ

紫陽花の
葉の緑の大きさよ
雨に打たれて
揺れている

キラリと光る
水玉真珠を
作っては作っては
大地に落として

紫陽花の花に
雨が落ちています
哀しみを
洗い流すように

『失恋 (06/13)』

愛する人との
思い出が
胸を襲って
息もつけない
痛みなのです

その傷みは
一年二年とね
続くのですよ
人を愛するって

そう言う事なのです

人を愛するって
悲しいのですよ
自分を傷つけて
苦しいのですよ
自分を傷つけて

愛は幸福じゃないのです
愛は祈りなのですよ
張り裂けそうな胸で
さあ 神に感謝しましょう
愛を祈りましょう

出来ますよね
愛を祈りましょう
それで失った愛へ
さあ泣きましょう
声を出して泣きましょう

愛する人との
思い出を

大事にして下さい
自分の傷みを
大事にして下さい

一年二年と
愛する人との
張り裂けそうな
別れをね
泣きましょう

『空の青 (06/18)』

どこまでも
空は青く澄み
陽の光は
地上にそそぐ

緑の大地よ
流れるいづる川よ
高き嶺の山々よ

空の清き青よ

おお！ 私の悩みよ
真紅に燃えて
あの空の青へと
飛んで碎けてくれ

おお！ 私の苦しみよ
真っ赤な炎となって
澄み渡る大空へと
深く昇ってくれ

緑の大地よ
流れるいずる河よ
高き嶺々よ
ああ！ 輝く光よ

どこまでも
空は青く澄み
陽の光は
地上にそそぐ

『失恋 (06/18)』

今夜も
暗い部屋で
一人忍び
泣きですか

さあ部屋を
明るくして
自分の哀しみを
鏡に映して

無理にでも
身体を動かすのです
やっpegらんさい
立ったり座ったり

それから
笑ってみて
泣きながらでも
笑ってみて

そうそう
そうやって
思い出を
大事にしましょう

いつかきつと
楽しい楽しい
美しい思い出に
生まれ変わるので

『梅の実 (06/21)』

甘酸っぱい
佳い香りの
梅の実
ザルの中

大きく丸く
梅の実
ころろころころ
ザルの中

一つ食べた
ら
幼い思い出が
胸に沸き立つ
ころろ梅の実

二つ食べた
ら
母の温もりが
身体に走れる
ころろ梅の実

まあるい
まあるい
梅の実
ころころ

甘く酸っぱい
思い出浮べ
ころころころころ
ざるのなか

『思い出 (06/21)』

ちいさい
ちいさい
私の思い出
心の泪

ビーロドの
小箱に入れた
私の宝石
私の思い出

陽に当てると
七色に輝く
私の思い出
夢と希望の

ちいさな
ちいさな
私の思い出
心の涙

『おみなじ (06/25)』

一人街を彷徨えば
美しきおみなごに
心奪われし黒髪へ
思い焦がれし君が胸

抱くことがあろうか
私の人生に
淡雪がごとくに
消え去りし私の夢

ああ私の人生よ
どこに彷徨えり
美しきおみなごに
想い恋がれし

『雨煙 (06/25)』

霧雨に咲くわ
色美しきパラソルの
踊る街並み霧の中

そのみ脚がミニより
はみ出したる
おみなごの美しく
響く靴音の歩道

早朝の遊歩道は
美しきおみなごらの
パラソルと靴音
霧雨の中に消えし

『哀れ (06/29)』

なにが哀しくて
すて寝するねん
なにが不満で
すて寝するねん

なあ人生
誰やっておなじやねん
みなはれやししゃ
笑顔で心が震えておろうがな

あれはな泣いているんだっせ
そりゃーなぜだか
わてかてしりゃしません
けどなすて寝しておるかー

あんさんは甘えておるます
きょうはよろしゅうまっせ
すて寝しなはりまっせ
でも明日からは……わかりますな

『紅の月 (06/29)』

真夜中の紅の月屋根の上
真っ赤に泣いて雲に隠す

雲間から覗いてる
あなたの涙
キラリ光ってなぜ泣くの

人はみな夢の中
寝息を発てて

静かに静かに夢の道

人はみな目を瞑り
寝息を発てて
深く深く幸の道

真夜中の紅の月まあるくなあって
真っ赤に泣いて雲の中

雲が拭く紅の泪
キラリキラリ
光ってお月さま

人はみな寝息を発てて
静かに静かに夢の国
深く深く幸の国

人はみな眠りの世界
夢を見て独り言
独り言幼な顔

真夜中の紅の月屋根の上
真っ赤に泣いて雲に隠す

End all 1994/06